



1994 年(平成 6 年)
6 月号 (No. 589)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

悠久岳誼・訪台登山交流団報告	1
合歓山登山	2
雪山登山	3
報告	
第 22 回山岳史懇談会	5
第 25 回山岳図書を語る夕べ	5
さくらハイク	6
第 3 回赤シャツ懇親山行	7
支部だより	8
熊本 東九州 京都 岐阜 東海 静岡 秋田	
海外の山	11
東西南北	
天龍川ウエストーン祭	12
山と自然の断章(9)	12
ウエストンの古い葉書・続報	13
山と医療	13
図書紹介	14
『スパンティック全員登頂』『桑頂 抗沙峰登山隊報告』『80 歳はまだ 現役』『飯豊』『ヒマラヤ山河誌』 『HIRE OF HIMAL』	
自然保護随想	15
書籍受入報告/住所変更	16
新入会員(復活)	17
会務報告	18
INFORMATION/ルーム日誌 /会員異動	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

『悠久岳誼』

訪台登山交流団報告

【計画の発端と経緯】

このところ疎遠になっていた台湾の登山界との交流は、中華民国山岳協会が「中華台北」として、アジア山岳会議への参加、昨年八月のUIAAへの加盟復帰などを通じ、急速に親密度を深めてきた。

中華山協の蔡禮樂理事長も、一九九二年度の本会の総会、年次晩餐会に出席され、その都度本会からの親善登山団の訪台を強く要望されていた。一方、中華山協の名誉会員でもある平林秀雄会員からも、機会あるごとに一日も早く本会から公式の親善登山団を送るべきであるとの意見が寄せられていた。

松田雄一

このような状況下で、まず昨年七月、藤平会長、大森常務理事が訪台し、中華山協への表敬、「北アルプス自然保護・安全登山案内書」作成への協力に対する謝意表明を行ってきた。

ついで八月十一日には、来日中の蔡禮樂氏をお招きし、藤平会長以下十二名の関係者によりプレスクラブで歓迎夕食会を開催した。この席上蔡理事長から重ねて訪台登山交流団の招請申し出を受けた。

これを受けて木村俊博・海外連絡委員(台湾担当)が窓口となって、中華山協の季剛龍理事(国際交流組長)との間で事務的な計画をつめた。

さらに十一月十六日、新橋第一ホテル別館に、松田、木村、大谷(海外連絡担当理事)の三名が在京中の蔡理事長を訪問して、具体的に計画の打ち合わせを行い、春の雪山、合歓山への交流登山の計画が固まった。なお合歓山については、今回の日本からの参加者に高齢者が多いことを考慮して、蔡氏の推薦にもとづき選定されたことを付記しておきたい。

かくして「山」二月号(五八五号)で訪台登山の計画を公表し、メンバーを公募したところ三十五名の参加申し込みがあり、ここに訪台計画が決定した。

【全国各地から三十五名参加】

●合歓山隊

藤平会長(団長)、松田雄一(副団長)、木村俊博(秘書)、平林秀雄、吉村健児、川崎泰男、遠藤昭治、諏訪弘、玉川勝彦、斎藤哲郎、以上十名。

●雪山隊(*印はグループリーダー)

山口俊輔(隊長)、石川康秀(副隊長) 佐藤登代子(会計)、*宮本数男、長谷川清、藤井茂雄、太田昭、山内眞行、太田慶子、*加賀谷昭一、安藤武俊、千田早苗、加藤盛一、*大塚宏閣、仲村恒明、西川顕、中谷絹子、*小林碧、川口章、二宮善蔵、川上進、武田幸男、*樋口公臣、柴田初子、原田敬子、以上二十五名参加。

参加者は中高年齢者が主体で、合歓山隊十名の平均年齢が六十七歳、雪山隊二十五名の平均年齢は六十歳弱である。また女性の参加者は五名。地方からの参加者も多く、全国各地の十五の支部から計二十三名の参加者があった。参加者のなかには過去に台湾の山に登っていて、中華山協のお世話になっていた者も多く、兵庫の川崎隊員(兵庫岳連副理事長)の言葉を借りれば、

「今回の友好登山は、永年にわたり多数の日本の山仲間がお世話になり、迷惑をかけてきたお礼の意味を込めた訪台」でもあり、その意味でも将来に対する友好の絆を深めることができた。

これに対する中華山協側も、蔡理事長以下、会をあげて歓待に当たり、合歙山隊には蔡理事長、余世傑常務理事、連安尹理事のベテランが参加、莊再傳氏が嚮導員を務めた。雪山隊には四名の嚮導員が配置されたが、リーダーの梁明本氏は副秘書長でもあり、明春のチョモランマ隊の隊長、同じく隊員の游宝環さん(女性)、陳局明氏、呉龍揚氏は若手のホープである。

四月十八日、成田、名古屋、大阪、福岡の各空港を発った一行は、十三時すぎ全員台北柳園空港に集結。蔡理事長以下中華山協メンバーの出迎えを受け、バスで宿舍帝后大飯店へ。小憩の後、四時すぎ、藤平団長以下十名の代表は、中華民国体育運動総会(体協)を表敬訪問、郭宗清会長と懇談。午後六時、全員で中山北路にある中華山協の新しい事務所を表敬訪問し、記念品の交換を行った。

一行は引き続き欣葉・台菜雙城店にて開催された中華山協主催の盛大な歓迎晩餐会に出席した。この晩餐会には前記郭宗清会長も出席され、UIAA復帰後、初の公式登山団として訪台し

た我々を温かく迎えてくださった。

翌十九日、合歙山隊十四名、雪山隊二十九名は、二台のバスでそれぞれ現地へ向け出発した。詳細は各隊の報告に委ねることにするが、この時季には珍しい三日間にわたる好天に恵まれ、四月二十日、両隊とも無事登頂に成功することができた。

四月二十一日、昼過ぎ両隊は武陵賓館に到着して合流。その晩は全員一堂に会して、両隊の登頂を祝した。

四月二十二日、両隊それぞれのバスに分乗し、六時、台北に向け出発した。途中、南山、宜蘭を経由して台北には十三時に帰着した。午後は休養。夜は海鮮料理「甲天下」における中華山協主催の登頂記念祝賀パーティーに出席。席上、今回嚮導員としてお世話くださった明春のチョモランマ登山隊、梁隊長以下の各位に対する感謝の気持ちとして、同隊の遠征資金の一部になればと、資金のカンパを行って寸志を贈り、成功を祈った。

四月二十三日、四班に分かれて帰国。

今回の友好登山をふり返ってみると、目的とする両峰の登頂も一名を除き全員が果たし、友好親善の面でも多大な成果を収めることができた。

お世話になった中華山協の蔡禮樂理事長以下関係各位には深甚なる謝意を表

する次第である。

最後に計画当初から種々ご指導いただいた平林氏、秘書長として実務面を担当された木村氏、現地には都合で行かれなかったが、担当理事としてご協力いただいた大谷理事、雪山の経験者としてアドバイスしていただいた織田沢美知子氏、雪山隊の隊長、副隊長を引き受けてくださった山口理事、石川委員、ならびに雪山隊にあって班長としてお世話くださった各位に対して、記して謝意を表します。

合歙山登山

諏訪 弘

●合歙山主峰へ

四月十九日午前八時、一行十四名はマイクロバスで台北を出発。昨夜の歓迎行事で心もうちとけ、車中は大にぎわいである。中華山協の方々は、日本語が上手で、日本側のメンバーも台湾の山を登っている者が多く、旧交を温め、話も弾む。

台中までハイウエーを南下し、埔里への途上にある雙冬に着く。同行の平林さんが戦時中、台北の師範学校の女子の教え子を疎開させていたという雙冬国民小学校を訪ねる。戦乱激動の昔日の教師時代を偲ばれる姿には、胸に迫るものがあった。

果樹園で知られる埔里を経て、車は山道にかかり、やがて海拔一一五〇メートルの霧社に着く。ここは一九三〇年有名な「霧社事件」蜂起の地である。

中央山脈を東に眺めながら、台湾の山岳地帯の中核を走る。合歙山塊が間近になると溪谷も深くなり、人家も見えなくなる。山岳警備隊の駐在する避難小屋から見ると、合歙山東峰が深い溪谷に囲まれて偉容を誇っている。北面に主峰がドーム状に広がっている。思わず歓声が上がると、台北を出て七時間、南国の陽をあびて、やっと目指す山にたどり着いたのだ。外は肌寒い。標高は三二七五メートルである。

主峰登山口の武嶺の峠から中華山協の連さんの先導で登り始める。蔡理事長、藤平会長が歓談しながら登っている。隊員たちも和気あいあい、思い思いの感慨を持ちながら登る。

峠から四十五分で三六一六メートルの合歙山主峰の山頂に立つことができ。パラ線に囲まれた山頂には、立派な二等三角点の標石が建てられていた。山頂から北に北峰、北東に石門山、東に東峰、さらに奇萊山の主峰と北峰が峨々たる岩肌を見せている。夕方五時下山。

今夜の宿は林務局の経営する招待所「松雪楼」である。合歙山東峰の北側にあるスキー場(台湾唯一のスキーリ

フトがあった……ただし現在使用不能)の基部である。

夕食時には、紹興酒とビールで何度も乾杯し、登頂を祝した。夕食後談話室でくつろぎながら懇談する。蔡理事長からは、台湾登山界の歴史的な歩みについての話を聴き、日華の深い絆を知ることができた。藤平会長からは山登りの哲学に親しく触れることができたとほか、吉村さんなど参加者からは心を開いた話を聞くことができ、思い出に残る夜となった。バルコニーに出て夜空を仰ぐ。北極星を中心に北斗七星が大きな斗を画いており、その美しさに絶句した。

●北峰から東峰へ



合歡山に登頂して満足顔の面々

四月二十日、快晴の朝を迎える。松雪楼を出発し、一路北峰へ向かう。石門山を巻いてかなり下ったところが登山口である。登り口はイバラの生い茂った岩場で、乾燥した山であったが、かなりの急登である。

展望のよい場所で一服する。八十一歳を超える平林さんは「人生、生きていてよかった。若い頃は何でもこんな辛い山登りをするんだ、と思っていたが、今は、今日登らなくては後は登れない」と、生きている健康の喜びを実感を含めて語られていたことが印象に残る。中華山協名誉会員でもある平林さんは「台湾アルプス三〇〇〇メートル峰一五〇」の発刊に向け、目下執筆中とか。

登り始めてから一時間半、眼下に高地民族の住んでいる大禹嶺の集落が見えてきた。標高三二〇〇メートル地帯は矢竹(かつて現地の人々が狩猟にこの竹を矢に使ったといわれる)の中を行く。山全体が黄金色に光っている。西北西に残雪をいただいた臥牛のような山「雪山」が見えてきた。三八八四メートルの第一級の名山である。

十時三十五分、全員が山頂に立った。感動の一瞬。大パノラマに驚かされる。しばらくの間山座同定を楽しむ。玉川さんは三脚を据えて本格的に写真撮影を行い、斎藤さんは花連の中学校に在学中に終戦を迎えただけに、花連へ流

れる谷を見下ろし感慨に浸っている。遠藤さん、川崎さんはかつて登った雪山や玉山の回想に耽っている。

南西方向に、最高峰の玉山がうっすらと浮かんで見える。南方すぐ手前には合歡山の主峰、東峰が座っている。隸書で二等三角点と刻まれている標石を囲み、記念撮影を行う。富士山を台湾に持つとすると十九番目の高さのこと。余さんはハーマンニカで「雪山讃歌」を歌う。隊員の心が一つになったような余韻が残った。

帰路は爽やかな風に吹かれながら登山口へと一気に下山、松雪楼に戻る。昼食後、午後二時、東峰を目指す。美しく澄んだ空を見上げながらの山行である。野鳥の鳴き声を耳にしながら矢竹の斜面の踏み跡を各自のペースで登る。森林限界を越えると、日だまりには石楠花の花が美しく咲いている。標高三三八〇メートルに達したところ、奇萊山主峰の谷から霧が昇ってきて、ガスに包まれた。息を弾ませ、ステックを小刻みにする。間もなく双耳峰の山頂だ。南の峰が標高三四一六メートルの合歡山東峰である。

余さんのハーマンニカ伴奏で「何日君再来」を歌う。山頂に拍手がわく。一足遅れて蔡、藤平両会長、木村さん、連さんが到着したのだ。木村さんの笑顔が強く印象に残った。歌声が盛り上

がり、両国登山隊の心が一つになった。日華交流登山のクライマックスである。歌もいつの間にか「山よさよなら……」に替わり、心温まるひと時のうちに下山の途に着く。

山頂で荘さんから大自然が好きだという彼の人生観、自然観についての話を聞く。私も同感である。連さんは平泉文化に大きな関心を持っており、訪ねてみたいという。

自然と人との出会い、触れ合いの思い出の数々を抱きながら、明日は梨山、環山を経て武陵賓館で雪山隊と合流。

雪山登山

山口俊輔・他

台湾第二位の高峰雪山登山には、二十五名が参加した。中華山協からは、海外遠征の経験も豊富な実力者、梁明本さんをリーダーとする四名の嚮導員(ガイド)が参加し、登山を成功裡に導いてくれた。雪山は台湾の中央部に位置し、台北からほぼ一日かけて登山口の武陵農場へいき、七卡山荘に一泊、ここから頂上往復二日の行程である。二十五名のメンバーは平均年齢が六十歳近いことと、一日の高低差一八〇〇メートルのコースを、シュラフ、食料持ちの小屋泊まりの形で登ることで全員が登頂できるか否か心配ではあ



雪山・カールでひと休み

たが、さすがJACの会員、これは杞憂。二十四名が登頂した。(山口俊輔)

●台北から七卡山荘まで

四月十九日九時過ぎ、バスで台北を出発。途中、宜蘭で遅い昼食をとって、国道七号線(東西横貫公路)を梨山方面に向かう。バスは深い山間を行き、武陵農場に着く。この付近は梨の花が咲き満ちて美しい。登山口でバスを降りて、登山開始。午後四時を回ってはいたが、約二時間半、きつい登りを頑張つて、夕暮れの七卡山荘へ。この付近は昨年「雪霸国立公園」に指定されて、登山道も、道標も、小屋も整備されていた。(小林 碧)

●三六九山荘から雪山へ

四月二十日、朝三時の起床。満天の星である。五時半出発。三十分も登ったころ、日の出。南湖大山や周囲の山が美しく輝いている。急な登りが連

続する。三十分一ピッチペースなので、何とか息をついてはいける。急登を約二時間、やがて稜線。八時二十分、雪山東峰に着いた。南湖大山、中央尖山、合歓山、遠くに玉山も見える素晴らしい眺めだ。東峰から右前方下に、今日の宿泊地「三六九山荘」も見える。しかし、雪山頂上を登ってから戻つての宿泊地だ。まだ先は長い。ゆったりした東北の山を彷彿させる稜線には、石楠花が咲き乱れていた。(千田早苗)

ザックを小屋にデポして、軽装で頂上へ向かう。日本の秩父の稜線に似たコースを再び登る。いくぶん傾斜は弱くなったけれど原生林の登りはかなりきつい。途中、ただ一か所の水場を横に見る。三六九山荘から頂上までは約二五〇メートルの標高差とはいえず、途中の樹林帯は登り下りが多く、約二時間後によろやく、雪山のカール下に着いた。カールは立山のカールを低くしたような感じ。稜線近くはまだ雪が多く残っていた。

カールの中央部をジグザグに登山道を登る。頂上直下は雪面をキックステップ。頂上着、十五時。三六〇度の展望に感激した。苦しい登山ではあったけれど全員登れてよかった。(樋口公臣) 頂上からの大観、まず目につくのは中央尖山や南湖大山の勇姿。玉山も遠望することができる。大霸尖山は雪山

北峰の陰で見えなかった。滞頂四十分。皆思い思いにシャッターを切る。下りは雪の斜面を避けて頁岩の斜面を下った。皆疲れを知らない。四十分ほどでモレーンの裾に着き、改めて台湾随一といわれる氷河遺跡をしげしげと仰いだ。下りは登ってきた道を三六九山荘へ。途中、水場でテルモスを満たした。

甘木林山(三六九〇メートル)の中腹、大樹の鬱蒼とした冷杉(モミ)林のなかを下り、午後四時、小屋着。夜は登頂の喜びに沸き立った。(藤井茂雄)

四月二十一日、早朝の三六九山荘からの眺めは見事だ。中央尖山や南湖大山の瑞雲に茜さす日の出。今日は雪山ともお別れ。昨晚の乾杯、とりわけ嚮導員の梁さん他、山口隊長、最高年齢の柴田初子さん、想いはつきない。七時三十分、小屋を後にした。天気も引き続きよい。雪山東峰までの道の近くには石楠花がいっぱい咲き、楽しい。雪山東峰を通過してからは、一気の下り。約二時間半で、七卡山荘着。ふり返ってみるとこの急な登りをよく登ったものだと思う。改めて参加メンバーの強いのに絶句である。七卡山荘から登山口までさらに下ると、登山口にはバスが待っていた。武陵農場国民賓館着十二時三十分、ここで合歓山隊のメンバーと合流した。(仲村恒明)

雪山登頂を経た三六九山荘の夜は気楽に山を語り、山を歌って忘れられない。きらめく星は空を飾り、室内では肩寄せ、台湾山協のメンバーとJACの仲間の輪が広がる。雲上三六〇〇メートルの心温まる親善交流。(柴田初子) 還暦記念を雪山登頂で飾りました。(原田敬子) 荷物は重かったけれど楽しかった。温かい心を大切にする台湾の人たちに感謝。(佐藤登代子) 頂上まで行けるかどうか心配だったけれど、登れた。(千田早苗) 地域ごとにパーティーを組んでくれたので、多くのよき仲間と知り合いになりました。(山内眞行) 眺望の素晴らしさに感動。(長谷川清) 日本の山に似ていて親しみを覚えた。(武田幸男) 雪山頂上で一等三角点を見付けた。かなり古いものであった。(西川 顕) 往路、荷物はバリ島に誤送され、往生。急造りの荷物だったが、登頂できてうれしかった。(川口 章) ついに登れた雪山。昨年の苦しかった中央尖山が見えて感無量。(中西絹子) 最高の登山。皆さん強い。(安藤武俊) 一九七一年の玉山での岳友に会えて嬉しかった。(加藤盛一) 中華山協の方に大変お世話になりました。(川上 進・他残り全員)

第二十二回山岳史懇談会

地形図作成の歴史を学ぶ

茂見 猛

第二十二回の山岳史懇談会は二月二十五日、図書委員山口裕一氏の紹介で、国土地理院OBの佐藤悦氏に「もう一つの登山史、陸地測量部の登山」という演題で講演していただいた。

内容を説明すると、まず登山の種類



地形図の歴史を語る佐藤悦氏

として、信仰によるもの、レジャー（スポーツ）としての登山、調査のための登山の三つに大別されるが、今回のテーマは、調査のための登山（三角点を作るため）が取り上げられた。仕事のために登る他動的登山で、山行記録なども残らないのが普通であるという。

日本における調査登山は明治の初期より北海道開拓使、陸軍省、内務省、農商務省の四か所が始まり、紆余曲折しながら、明治の後半には陸軍省の参謀本部測量部に移管されて、続けられていくことになる。その過程で、三角測量の選点・造標・観測という作業のための登山が始まる。山頂近くに数週間もテント生活するようなこともあったという。大体一点を決定するのに二週間くらいかかったということだ。

これらの成果は現在、国土地理院に引き継がれている。

私たちが日常使っている地形図が、どのような歴史と過程を経て、現在の詳細なものになったかがよく分かった。初期の頃の苦労話やエピソード、貴重な資料のコピーの配布もあり、有意義で楽しい懇談会であった。

佐藤講師は昭和五十五年、国土地理院を退職後、山日記の地形図、山の高さの訂正などに協力された、日本山岳会とも関係の深い方である。再度機会を得てお話を伺いたいと思う。参加者二十四名。

第二十五回山岳図書を語る夕べ

夢のある新しい山の楽しみ方

図書委員会

三月二十五日、ルームにおいて「地図を使った風景スケッチ入門」（山と溪谷社 一九九三年九月発行 二、五〇〇円）を語る夕べが開かれた。講師は著者の山口裕一氏（会員）である。

今回の面白い特色は、まずこれまで以前例のない著者自身が語るところと、本の内容が山岳文学や登山記録、絵図・写真集ではなく、地図だけを使って風景スケッチを描くという、いわゆるHOW TOものであることだ。

最高登山が乾徳山であるという、ほとんど登山歴のない工学部機械科出身の山口氏が、どうしてこんなに地図にのめり込んでいったのか、についても興味を持った。

冒頭、山口氏は、この本は「入門」というジャンルのものであり、ある意味の「体験」のための本である。中身

を本当の意味で知っていただくためには、地図スケッチの方法を身につけていただくのが一番である。しかし、短い時間ではとても無理。そこで今日はこの本を書くについてどんな経緯があり、どんな出会いがあったかを中心に内容の概略を紹介したい、と述べた。

■地図スケッチとの出会い

まず子供の頃、地図を見るのにルーパーを使って、イメージ遊びに夢中になった体験がある。直接的には、NHKのテレビディレクターの仕事で、教育テレビ「みんなの科学」自然を探るシリーズ「川」での一枚の「阿波眺望図」（江戸時代）との出会いが発端である。

今の地図とこの眺望図を照合したところ、かなりいい加減と思っていた絵図が実は極めて精密な科学的な作品で、地図にぴったりとあっていたのである。（スライド使用）その時、地図からスケッチが描けるのではないかというアイデアがひらめいたという。

しかし、それからが大変だった。文字通り試行錯誤を重ねて、粘りに粘って、方法を探り、発見し、修正した。

まずは、山の断面図からトライしてみた。取り組みやすい地形ということとで神奈川県山北町の丸山を選んだ。しかし、なかなかきれいなスカイラインができない。そこで、今度は円筒面図

法を使つての投影図を考えた。これもスケッチに移すと道路が曲がってしまふなどうまくいかない。こうしたときに、子供向けの科学シリーズの出版企画の話が入って、本格的な取り組みを始め、特許も取った。これが既存の透視図法とは異なる「やわらかい透視図法」である。地図上から座標を数字で読み取り、画面に移してスケッチしていく方法だ。完成までに三年の月日が必要であつた。

そして最初の本格的な作品は、雑誌「ビーパル」からの注文の『山形県朝日山地・以東岳からの大鳥池』であつた。編集者に「どこでもOK」といつたら指定された場所である。もちろん、行ったこともなければ、写真を見たこともない。作品は雑誌に同じ視点から撮った写真と並べて掲載された。山口氏からすれば当たり前のことながら、読者は、あまりのソックリに驚いてしまい、写真から写したに違いないと、出版社に投書がきたほどであつた。これで山口氏もいっそう自信を深めた。

■幅広い利用分野
できあがってみると、この方法には実に多彩な利用分野が待っていた。
*風景復元
古い地図から昔の風景の再現を可能にした。なかでも東京都大田区の『馬込文士村の昭和初期の風景復元図』は

代表作である。「これが北原白秋、これが山本周五郎の家、このあたりが山王」などと実に楽しい。

*環境デザイン
テーマパークの設計パースなど未来図の製作にあたって地図スケッチは、現地の風景を写しとるのに優れた力を発揮。すでにプロのパース制作に役立っている。

*山座同定
JAC会員で「山座同定」に興味を持たない人はいない。実は「地図スケッチ」は「山座同定」そのものである。山口氏が「地図スケッチ」を指導したカルチャーセンターの生徒たちも、山口氏を中心にグループをつくって毎月会合を開き、すでに「山座同定」の傑作を多数生み出している。

また編集委員をしている雑誌「地図ニュース」でおきた山座同定論争のジャッジを頼まれたときも、「地図スケッチ」の方法で明快な正誤の判定を下し、地図専門家たちを唖らせた。
*スケッチ技術向上に役立つ
山容を的確にとらえるようになるの、スケッチ技術の向上が目覚ましい。

■おわりに
とにかく、この本はいろいろな出会いと偶然の重なりから生まれたといえる。エンジニアの道を避けて、文学青年の夢を託して入ったNHK、各出版

編集者との出会い。JAC入会も偶然と友人関係からだ。ほとんど山登りと無縁だった私が、JACの皆さんにお話しできるのはまるで夢のようだ。もし「地図スケッチ」に興味を持たれ、やってみたいという方がいらっしゃれば、ぜひ一緒にやれる機会をつくりたい。

◇ ◇ ◇

楽しい会だった。Y軸Z軸など面倒なところもあるが、一度は、やってみたくなる話だ。たちまち「日本百名山地図スケッチ」なんかを企画制作したくなる。夢のある新しい山の楽しみ方登場だ。参加者二十三名(川合 周)

さくらハイク

ジャック93会のこと

十月の新入会員オリエンテーションのとき、「山岳会が何をできるかではなく、自分たちが何をできるかを考えてほしい」といわれた。そこで新入会員有志で同期会を作り、何か行動を起こしたいと思った。

十二月の晩餐会。新高輪プリンスの大会場を埋めつくした先輩会員の方々の醸し出す、伝統と格式のある雰囲気や、山への情熱などの熱気に包まれて、興奮もさめやらぬ閉会直後、有志で同

期会の準備会を持つと約した。それから四月までに準備会を四回開いた。

四月十日午前九時、三十五人の新入会員と小倉理事以下十名の旧会員は初狩駅に集合。申し込み手続きの後、九時半、高川山に向けて出発した。二十分くらいで登山口に着く。周辺は杉の林の中で、椎茸の栽培場になっていた。

ここから一〇〇パーセントの登りばかりですと、係りの方に念を押されて歩き出す。二十分で展望が開け、すぐ足下にいま歩いてきた初狩の家々が見える。山の木々はまだ冬のままであるが、わずかにピンクの芽吹きが見られる。途中二回の小休止の後、山頂に十一時に着く。

大きな岩がゴロゴロしている狭いところで、家族づれなどのパーティーが何組もいた。御影石の立派な方位盤があり、天気がよくだったので、御正体山、三ツ峠など、記載されていた山は三六〇度、ほとんど確認できた。富士山は雲の中にまぎれて、真っ白い山頂付近が見えた。昼食後、記念撮影をして、少し下った尾根の広いところで、自己紹介や中川理事のリードで山の唄を歌ったり、「シカヨー社の唄」の踊りの指導まであり、盛り上がった。

そして、有志によりかねて準備の九三年度入会の会員による同期会の説明となる。

一、名称は「ジャック93会」とする。

(日本山岳会のJACをカタカナに)

二、参加資格・九三年四月一日〜九四年三月三十一日までの新入会員。

三、お互いに親睦をはかり、クラブライフを大いに楽しみ、かつまた、日本山岳会のために少しでも寄与できるように活動を目的とする。

四、会長は星野幸太郎会員、幹事長は本田栄三郎会員。

以上、参加者による賛同を得て正式に発会した。最後に『いーつまでも絶えることなく、友達でいよう……』と合唱した後、十四時、下山にかかった。杉の林の中を一時間ほど下ったところで車道に出た。富士急線の壬生まで歩く。途中桜が満開だった。

十五時半解散。新入会員にとって記念すべき楽しい一日だった。

(三井吉由江)

第三回赤シャツ懇親山行

入笠山・マナスル山荘

土曜会

昨年の十月三十日、中央線富士見駅に降りたときは本降りの雨だった。待合室で昼食をとって、バスの発車まで待つ。一日三本というバスは、利用者が少ないとかで午後の一本だけだ。バ

スの姿が見えないのでちょっと心配になり、営業所で確かめると、間違いない出るとのことです。まずは一安心。

十二時四十五分発の御所平行きバスに乗り込む。町中を抜け林道に入っても、依然雲が低く垂れこめて車窓からは何も見えない。約五十分で御所平マナスル山荘に着く。雨は小降りになっていた。

玄関前に先着の坂倉さんが出迎えてくれた。土間の暖かいストーブの周りに集まって、お互いに再会の挨拶を交わす。その間に部屋割りも決まり、部屋のこたつで早速持参のアルコールで四方山話に花を咲かせる。

夕食のテーブルにはワイン、焼き魚、山菜とたくさん料理が並んで食べきれないほどだ。食堂には他の宿泊客も大勢いるので、部屋に戻り、またこたつに集まってアルコールも仕入れての小宴会となる。自己紹介しながら、山の話や土曜会の今後の在り方などについて話し合う。耳を澄ますと、まだ雨垂れの音が聞こえる。明日の天気を気にしながら各自床に入る。

翌三十一日、目を覚ますと部屋の中がいやに明るく。窓の外は雲一つない青空だ。朝食をすませ、ゆっくりと支度を整えて表へ出る。陽がまぶしい。そこへ河野氏が到着した。最終夜行電車で青柳駅で下車、ハイキングコー

スを約三時間で到着とのことで、足の達者なのは驚いた。

山荘前で一同記念写真を撮り、入笠山の頂上を目指して歩き出す。若い人は足が早い。年寄りはずいぶん登っていく。振り返ると、意外に近く八ヶ岳が見える。

頂上の展望は素晴らしい。釜無山の後ろに甲斐駒ヶ岳、その右に仙丈岳、さらに中央アルプス。北アルプスには雲がかかっていた。右に目を転じると美ヶ原から霧ヶ峰、そして広大な裾野を広げる八ヶ岳連峰。いつきても素晴らしい展望には感激する。少々風が強く寒い。記念写真を撮って、風の当たらない岩陰に腰を下ろす。ちょうど正面に八ヶ岳を見ながら、どなたかの缶ビールを一口いただく。

展望を堪能したので、山荘まで一気に下る。おいてある荷物を取り、車できた四人、大河原湿原をまわる二人と再会を約し、山荘の奥さんの打ち鳴らす鐘の音に送られて、十時五十分山荘を出発した。途中立ち並ぶ山荘の前を通ると、若い人の甲高い声が晴れわたった青空に聞こえてくる。鐘打平からの道もカラマツの落葉が敷きつめられていて、晩秋の静かな針葉樹林の中をやがてお花茶屋に着く。茶屋が二軒あるが、いずれも閉まっていて人の気配もない。その前の広場で昼食にする。

シラカバの木が二、三本あり、白い幹が秋の陽光に光っている。それを背景にカラマツの針葉がハラハラと舞いながら降ってくる。襟元や靴の中、手に持っているお茶のカップの中までたくさん入ってくる。まさにカラマツ茶だ。青空をバックに針葉が舞い落ちる風情は素晴らしい。カメラに納めたいが、これだけはうまく撮れない。じつと座っていると眠くなるような陽気だ。やおら腰を上げて、すずらの里駅へ向かう。車でも登れるような広い道をゆくりと下る。やがて工事中の広い道に出る。途中から簡易舗装道路となる。道路脇の稲が真っ直ぐ立っている。穂はあるが、触ってみると実が入っていない。隣の刈り取った跡地で稲を焼いている。白い煙が横に長く八ヶ岳連峰のほうへゆくりと流れていく。冷夏のためお米がとれない悔しさ、農家の人たちはやり切れない気持ちでこの煙を見ていることだろう。同情を禁じ得ない。

道は大きく左に折れ、大きなケヤキのある八幡神社へ出る。その前を通り過ぎ、交差点をわたってさらに坂を上ると、正面の高いところにすずらの里駅がある。振り返ると青空の中に入笠山が微笑んでいるようだ。待つ間もなく電車の客となる。参加者十五名。

(内藤 勇)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

熊本支部

晩餐会も山行も大いに楽し

脇坂先生を囲む会

昨年夏、八十歳でモンブランに登り、海外の山・一五〇座登頂を達成された脇坂順一会員（福岡支部）が、十月十四日、所用で来熊されたのを機会に、登山のお祝いと、併せて傘寿のお祝いの会を開催した。

会食の後、脇坂会員からモンブラン登頂の報告とスライドの上映があり、登山のためのトレーニングや食事のこなど、夢を追いかけて精進を重ねる氏の山への限らない情熱に、出席者一同、改めて敬服した。（十八名参加）

平成六年例会
まだ正月気分が残る一月八日、新年

晩餐会を開催した。本田支部長の年次晩餐会の報告をかねた挨拶のあと宴会に移り、新春にふさわしい和やかな歓談が広がった。

やがて満腹になった頃、出席者全員が近況や今年の抱負を披露、酒の勢いもあって口のほうも次第になめらかとなり、会場は爆笑につつまれた。

近年、支部会員の高齢化著しく、平均年齢五十八歳。山行よりも晩餐会を楽しむにしている会員も少なくないが、この夜ばかりは久しぶりの山の話に花が咲き、時間の経つのも忘れるほどの盛況だった。（二十名参加）

春季例会・大崩山系五葉山登山

三月十二日、雨模様様の空を気にしな



80歳で海外150座登頂の脇坂会員を祝う会（熊本支部）

がら、登山口の見立の民宿に集合した。

前夜祭は、ところ狭しと並んだ猪鍋、鹿肉の刺身、山菜料理などの山の珍味を肴に、酒のピッチも上がって大いに盛り上がった。翌朝は、林道を標高一〇〇〇メートル近くまで車で上がり、そこから山に登った。折からの寒さの戻りで、冬へと逆戻りした五葉岳山頂（二五七〇メートル）からの眺めは素晴らしく、白い霧水をつけた大崩山群が一望の下に見渡せた。帰路は稜線伝いに、お姫山（一五五〇メートル）お化粧山（一四五〇メートル）へと縦走して下山した。（十五名参加）

（田上敏行）

東九州支部

月例山行

夏木山から木山内岳へ

当支部では毎月一回、県境の人のあまり歩いていない山を選んで登っている。三月二十七日、夏木山から木山内岳を歩いた。

大分五時発。藤河内溪谷でピンクのミツバツツジに迎えられ、ゲートの開いた林道へ。第二夏木橋を過ぎて行き止まり。車をおいて、登山口に七時三十分着。

いきなり急な登りで、木の根を握り、落ち葉でふらつき、檜山台で一息入れ



残雪の夏木山頂で（東九州支部）

る。昨日降った雪で手足が滑る。地面の白さに喜び、あえぎあえぎ進む。右手に鋸歯状の岩場が見えるともう稜線である。夏木山頂（二三八六メートル）九時二十分、万歳。腹の虫に餌をやり、「ヤッホ」で篠竹の藪へ突入。一かき三〇センチ進めば上等、前に近づき過ぎると跳ね返りの竹で「パチッ」と叩かれ、涙する。倒木に足は上がらず、地面に降りるのに手間取り、倒れた篠竹に足を挟まれて身動きもできない。シャクナゲ、アケボノツツジ、モミ、トガ、ヒメシヤラ、ブナの大木が突然現れると「立派だ」と立ち止まり、岩場のピークで「まだ遠い」「あの山は」と生き返ったような顔をする。雪に小

動物の足跡がついていれば、兎だ、狐だ、と勝手に叫ぶ。木登りしたり、地図、コンパス、高度計で方向を定め、寒さと汗にまみれ、難行苦行の末、喜平越へ十四時十分。木山内岳(一四〇メートル)へピストンで一時間。雪に岩が隠されていて危なく、観音滝まで足場に注意して下る。おいしい水をたらふく飲み、元気を出して藤河内に十六時四十分着。

大木の前に立つと、何かを語りかけられていよう、自然と頭が下がる。どうか美しい樹木がいつまでも残っていますように。全コース人手の加わらないままの山であってほしい。

三年がかりの県境歩きの最後の参加者は二十六歳から六十四歳まで十四名。故加藤数功会員が藤河内溪谷を全国に紹介したのは一九五五年頃で、観音滝まではファミリーで行ける。夏木新道は一九八一年頃、茅野学生会員のグループが開いた。(西孝子)

京都支部

銀杏峰スキー登山

毎年三月に京都支部では、お隣りの関西支部と合同でスキー登山を行っている。今までに湖北武奈ヶ岳、但馬の妙見山、加賀大日岳などに登り、頂上から滑った。本年は第六回目、京都支

部の担当の年である。雪の少なかったここ数年、山運びに苦労することもあったが、幸い今年は予想外に積雪も多く、福井県の銀杏峰(げなんぼ/一四四〇・七メートル)に決まった。地元福井支部にも声をかけて、三支部合わせて三十七名の大パーティーとなった。

三月十二日、あまご養魚場に併設の民宿での懇親会は、夜遅くまで大いに盛り上がった。



霧氷咲く銀杏峰スキー山行(京都支部)

十三日、朝七時半に出発。林道をしばらく歩いた後、急斜面の尾根に取りついたが、年季の入ったシル、日頃の手入れの悪いシルから先に雪が付き始め、雪がついて下駄状になったスキーの持ち主が、キックターンでバランスを崩したり、エッジがきかないために横滑りして、ペースが落ちてくる。三十七名の隊列は昼食時には、先頭と最後尾で四十分の差がついてしまった。頂上まで三〇〇メートルを残して途中断念と決める。下りもあまり快適とはいえない樹林の中を、三十数名が思い思いに滑る様は、壮観、かつ騒観であった。

支部合同の懇親山行ではあるが、人数も三十名を超えるとなかなか大変である。次回は装備、とくにシルの点検などに注意して臨みたい。(杉山イタル)

岐阜支部

支部活動の現状

当支部の昨秋からの行事と平成六年度の事業計画を報告します。

平成五年

●秋季懇親山行

十月二日、三日 若柳山(一五九三メートル) 益田郡小坂町湯屋温泉の『ニコニコ荘』に四十一名参加。

●第一回故今西先生を偲ぶ会

十月三十、三十一日 百一名の参加者があり、「偲ぶ会」では、藤平会長をはじめ六氏から先生の思い出を語っていただいた。翌日は美濃市近郊の高賀山(一二四メートル)に登った。

●現地小集会

十一月七日 高屋山(一一三六メートル)に登る。三十五名参加。

●山岳講演会

十一月十二日 松田雄一前副会長に「ヒマラヤを越えるツル」の講演をしていただいた。

●平成六年度事業計画

●総会・懇親会

四月十六日『五左』

●春季懇親山行

四月十七日 毘沙門岳(一三八五・五メートル)登山(白鳥五万分の一)

●岐阜・京都支部合同懇親山行

五月二十一日、『源屋』二十二日西ノ水(一一二〇・五メートル)登山。(能郷白山五万分の一)

●秋季懇親山行

十月十五日『宗五郎』十六日大洞山(二三四八・七メートル)登山。(有峰湖五万分の一)

●故今西先生を偲ぶ会

十月二十九、三十日

●秋季現地小集会

十一月六日 北山(九〇七・五メー

トル) (美濃五万分の一)

●山岳講演会

十一月中旬 岐阜市明德公民館 講師・重廣恒夫会員

●新年会

平成七年一月十二日 岐山会館 (高木基揚)

東海支部

盛りだくさんの支部行事

支部員、支部友、合わせて約三百四十名の構成員。新たに支部のルームができ、雑談会、登山講習会、絵画教室などのクラブライフを楽しんでいる。

年四回の支部報発行、月例山行、支部友集会、写真展、絵画展、それに加えて忘年会、新年会、壮行会、報告会など年間を通して盛りだくさんの行事が行われ、それぞれに多数の参加をみている。

また本年二月には懸案の『東海山岳六号』が刊行されたが、早くも七号発刊の話題が取り沙汰されているような状況である。



新ルーム入口の会札

「山からの絵だより展」開催の準備が進められている。さらにこのたびの本部からの図書移管にともない、支部図書委員を選任し、山岳図書の充実を図ろうとしている。

(安藤忠夫)

外国登山関係では、ちょうどこの時期、昨年のクラウン峰隊、メントーサ峰隊に引き続き、今春支部が派遣したエベレスト・サウスビラー隊(総隊長湯浅道男)からの朗報を待っているところである。

支部の主要行事である月例山行は、昨年十二月中旬実施の忘年山行に三十五名、新年山行も十七名の参加をみた。次いで、二月の伊吹山雪山訓練登山が二十二名、三月奥美濃・毘沙門岳は十名の参加を得て実施された。また、四月上旬には鈴鹿・雲母峰、下旬には奥三河で「山菜を楽しむ夕べ」があったが、これもまた三十数名の参加と盛況だった。

なお、今後の山行計画として、五月二十二日に鈴鹿・御池岳、六月十一、十二日に御岳、七月九、十日に鈴鹿・雨乞岳、八月十九、二十一日には八ヶ岳を予定しているので、参加希望があれば支部事務局へ問い合わせてください。

また、このほか昨年に引き続き夏の「山からの絵だより展」開催の準備が進められている。さらにこのたびの本部からの図書移管にともない、支部図書委員を選任し、山岳図書の充実を図ろうとしている。

静岡支部

春秋に懇親山行

現在の支部会員数は九十六名である。当支部は昭和三十三年頃から「もみじ会」と称して、支部会員を中心に、JAC本部、各地支部の希望者を募って毎年、県内の山で懇親山行を行ってきたが、三十回で中止し、現在の「懇親山行」に移った。

懇親山行は毎年十一月に一泊軽登山を行い、春には日帰りまたは一泊で山野で材料持ち寄りの食事・談話を楽しむ集会を開く。とくにそうと決めたわけではないが、自然にそんなところに落ち着いて毎年実施されてきた。

山岳会の目標は「より困難で意義ある登山を実行すべきである」であろうが、その実現のエネルギーを結集できるのは個人か小さなグループであるから、山岳会はただその人たちに、思想統一の「場」を提供できるだけという考え方があからである。

昨年後半から本年前半にかけて行われた行事は次のとおりである。

春の懇親会は五月二十二、二十三日遠州岩岳山で本部若葉会山行が行われたのに合流した。

春の親睦会を中止した代わりに、九月二十五、二十六日は当支部・石間会員二六〇〇回登山を祝う会を、大井川



昨秋の懇親山行・大光山登山の参加者は27名(静岡支部)

と安倍川の分水山嶺をつくる無双連山の小猿郷で行った。参加十七名と人数は少なかったが、山間の過疎の農家を借りての懇親山行で、参加者一同満足した。

続いて恒例の秋の懇親登山は十一月十三、十四日、民宿一泊、安倍川上流大光山(一六五〇メートル)安倍峠で行った。参加者二十七名。前日の豪雨は晴れ渡り、それぞれに楽しい体験を重ねた。

本年に入って一月二十一日、静岡市内の東海軒会館で新年会開催。出席者二十七名で、本年の懇親登山の計画などを話し合い、春は五月十五日藤枝瀬

戸川上流、秋は十一月(日は未定)今年度開通した信州・遠州貫通国道の沿線、青崩峠付近と決まった。

(西郷正郎)

秋田支部

平成六年度支部総会開催の報告

わが秋田支部の総会は、さる四月二十四日正午から、秋田市の「ニューたけや」で会員二十二名が出席して開催された。

主なる内容は次の通り。

一、平成五年度の事業(韓国交流登山など)、決算、監査報告。

二、平成六年度の事業計画

山行(烏帽子山、姫ヶ岳と奥森吉、姐山)、会報発行二回(四ページ)、その他。

三、平成六年度予算 二十二万円(年支部会費千円プラス本部還元金・例年並み)。

四、支部会員確認 総数六十一名(新入会員二名)、入会予定者二名。なお、未納者は本会並びに支部とも各各三名のみでおおむね好調。

以上の議案が一部修正の上承認され、続いて恒例の懇親会が開催された。出席者二十三名。

(佐々木民秀)

海外の山

ホキマイ号の冒険

江本嘉伸

ヨットの話である。パイオニアワークという視点から、山の仲間たちに知ってもらいたいと思う。

六月二日、苫小牧港の造船所のドックから、長さ十二メートル、十八センチの小さなヨット「ホキマイ号」が出航した。乗っているのは、北海道大学大学院環境科学科の吉川謙二(三二)を隊長とし、大村朝淳(二九)新宮弘久(三〇)小泉 謙(二七)ら「北極環境調査隊」の四人。カムチャツカ半島に沿ってロシア海域を北上し、ベーリング海峡をめざす。北極海の海底の永久凍土の分布を調べて北極の「古環境」を探る目的だ。

日本ではなかなか見つからないというこの二本マストの「鉄製ヨット」は、一九七二年製の中古船だ。南太平洋を四年さまよってから福岡に着き、英語教師をしながらヨットの中で四年暮らしていた若いカナダ人夫婦から譲り受けた。吉川たちが五代目の所有者になる。

鉄製、といってもヨットはヨット

である。厳しい北極海の航行に耐えるよう、十一月一日、宮崎県日南市の漁港にヨットを移し、半年がかりの改造作業が始まった。ドックの人の助けを受けながら、昼夜ぶっ通しの仕事だった。

五メートルの鉄板製の船先(へさき)部分をさらに六メートル厚くし、耐氷性の高いプロペラカバーをつけた。小さい割に船体は重いの、スピードは最高でも七ノット(時速十二・五キロ)しか出ない。二本マストも重量を増すが、一本よりは折れにくい。レースには向かないがその分、悪天候と長距離に強いのが特徴だ。

船体には、調査のためのいろいろな仕掛けがしてある。

エネルギーを節約するためのソーラーパネル、三台のコンピュータ、気象情報を得るためのファクシミリ、位置を確認するためのGPS装置、キャビンで外の様子を見ることができきるリモコン・カメラだ。

「科学調査船ですから、データを収集、管理できなければ意味はないんです」と吉川は話していた。オーストラリアを自転車で縦断した十年前の旅を手始めに、ニュージーランドのクック山、アフリカのルエンゾリ山などに登頂、サハラ砂漠をリヤ

カーで超えたり、アマゾン川をいかにで遡行する冒険の日々を体験してきた科学者である。

九二年暮れから九三年二月にかけて、ナムチャバルワに消えた大西宏に代って隊長の指揮をとり、南極点までの徒歩環境調査行を成功させたばかり。山から砂漠、極地と行動の舞台を広げながら、次第に「人類のためになる、他人の手がけたことのない仕事」にマストを絞っていった点が、吉川の独特なところである。

六月下旬には、副隊長の原田鉦一郎(二七)(北大大学院理学研究科博士課程)ら四人がアラスカに飛び、吉川たちと合流してベーリング探査、海底地層の花粉分析などの調査を行う予定だ。

シベリア、カナダ、アラスカの永久凍土については、陸地の調査はかなり進んでいるが、大陸棚については未知の世界という。北極海の海底を魚探ソナーも使って測量し、できれば海底地図を作り、古モンゴロイの遺跡を発見したい、という。

二年目は、カラ海、バレンツ海などで調査を続ける予定だが、簡単な仕事ではない。「ホキマイ」マオリ族の言葉で「帰る」という意味の名のように無事帰還を祈りたい。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



天竜川ウエストン祭

中村純二

W・ウエストンは明治二十四年と二十六年、槍ヶ岳など登山の後、時又から浜松まで二度天竜川の舟下りを行っている。激流と美しい渓谷美はよほど面白かったようで「日本アルプス登山と探検」にも紹介の記事を記した。これが縁で、大正元年にはヴィクトリア女王の第三王子コンノート殿下が、さらに欧米からも多数の舟下り客が訪れるようになった。

昭和四十年には、旧時又港跡にウエストンの英文を刻んだ碑が建てられ、その模様は同年の会報にも記されている。

今回、日本聖公会に明治二十二年当時の若いウエストンの写



の時又港の上流約二〇メートルの河原に、そのまま保存されることになった。

真が所蔵されていることが、三井嘉雄会員の努力により判明した。これをもとに、立体写真像KKの盛岡氏が写真のような円形のレリーフを作り、これを掲げた顕彰碑が、新たに時又港の上部広場に建てられた。そしてこれから毎年、天竜川ウエストン祭がこの広場で開かれることになった。

四月二日十一時から、飯田観光協会と、天竜舟下りKK主催による祭りが始まり、田中飯田市長による式辞について、A・ソウプ英国公使夫妻による除幕式が行われた。前記田中市長や盛岡社長、当会の中村副会長、飯田商工会議所中島会頭、吉岡県会議員、沢柳市議会副議長らの献花の後、飯田少年少女合唱団によるウエストン讃歌の献歌、舟の安全祈願なども行われた。本会からは田中信濃副支部長や田畑資料委員も出席した。

なお、これまでの旧記念碑も、現在の時又港の上流約二〇メートルの河原に、そのまま保存されることになった。

山と自然の断章(9)

岡村治信

■湯坂道

箱根の湯坂道は、元箱根から宮の下に通ずるバス道路から岐れて鷹の巣山、浅間山、湯坂山の尾根を伝って湯本町に降りる延長八キロほどの山径である。鎌倉・室町時代にもっぱら用いられた箱根越えの街道で、源頼朝や曾我兄弟、阿仏尼などが通ったといわれる。

鷹の巣山の頂上からは箱根外輪山の南半分と二子山が真正面に望まれるし、中央火口丘の神山、駒ヶ岳の泰然たる風貌も捨て難い。眼下には宮の下の小湧谷の温泉街をふまえて明神岳・明星岳が優雅な稜線を連ね、その向こうには丹沢山塊の峰々が連なる。

このように、箱根火山の全容とその構造を観察するに最適な展望コースである上に、草尾根の静かな尾根道とところどころには苔むした古い石畳の跡も残っていて、そこを辿る人々にいかにも神さびた歴史の香りを感じさせてくれる。湯坂道こそ歴史と自然と人間が作り上げた理想的な散歩道である。

■登山の意義

山を歩いて自然との一体感を持ち得る人は幸いである。私は単純に足を運び予定コースをこなし、さしたる疲れ

もなくすませるようなそんな山歩きをしたいとは思わない。少なくとも大自然的の懐に抱かれて生命の喜びを感じるような山行であることを希わずにはいられない。永遠の時空に融合する実感をひとときでも味わえれば、いかなる肉体的苦勞も緊張も、また孤独の不安も避けようとは思わない。肉体的に限界のある人間として、せめて精神的に限りなく成長しようとする本来的な志向が満たされたと感ずるときに、その山行は私にとって最高のものであったといつも思う。

このような幸福感は恐らく他のいかなるスポーツや趣味の中にも見出すことはできないだろう。だからこそ、登山は魂の高揚であり立派な文化であるともいわれる。それだけにまた、登山の奥深い意義を自分の体で知るに至る道は険しいのである。

■観想的登山

諸外国ではいざ知らず、わが国では征服的登山よりは静観的登山が尊重され愛好される。この気風を普及させたのは大島亮吉氏やその流れを汲む伊藤秀五郎氏らの功績である。もっとも、その根底には日本の山岳地形や自然風土が、そして日本人の精神構造そのものが静観的登山に適しているというところがある。私は静観的登山に、さらに瞑想的ないし形而上的な要素を加味し

山と医療・中島道郎

1993年制定 UIAA 医療委員会
公認基準について(2)

第1編 トレッキング・
エクスペディション医学

第1章 急性高山病(AMS)および高
所肺水腫(HAPE)の緊急処置(オ
スヴァルト・エルツ)

軽症 AMS

(中等度頭痛、けだるさ、食欲不振、
むかつき、不眠等)

- 1) 数日間、ゆっくり休む
- 2) アスピリン、アセトアミノフェン
*1 経口
- 3) アセタゾラミド *2 500mg/日経口
*1 ピリナジン、アンヒバ(坐薬)
総合感冒薬PLの主剤
*2 ダイアモックス

重症 AMS ないし高所脳浮腫(HACE)

(アスピリン無効重度頭痛、嘔吐、
めまい、運動失調)

- 1) 下山、搬出、酸素補給
- 2a) デキサメサゾン *3 8mg経口ま
たは静注、後毎6時間、4mg 追
加投与、ないし
- 2b) プレドニゾン *4 50-100 mg

経口または静注、後毎8-12時間、
50mg 追加投与

- 3) 加圧袋 *5
できれば2)と3)は併用してよい。
*3 オルガドロン、デカドロン、コ
ルソン、デキサメサゾン等
*4 プレドニゾン、プレドニン等
*5 ガモフ・バッグ

HAPE

(息切れ、呼吸時がら音、チア
ノーゼ、呼吸促進等)

- 1) 下山、搬出、酸素補給
- 2) ニフェジピン *6 10-20mg 経口
および同20mg 徐放錠 *7 経口同
時投与
- 3) 加圧袋
2)と3)は併用してよい
*6 アグラート、ヘルラート、セパ
ミット、エマベリン他
*7 アグラートL、セパミットR等。

緊急事態

(HACE, HAPE 合併症)

- 1) 下山、搬出、酸素補給
- 2) デキサメサゾン、プレドニゾン、
およびニフェジピンを上記要領で投
与、それにアセタゾラミド 500mg
を追加
- 3) 加圧袋
2)と3)は併用してよい

た意味で静観的登山の語を用いるのが
より適当であると思う。

「静」は例えば動植物・地質地形な
ど専門的な観察調査から、歴史的、宗
教的側面の探求考証など、さらには単
に山頂からの展望を楽しむ、森林溪谷
に親しみ観賞することも含まれる。

「想」は自然と心との触れ合い、山と

の対話による感動や深い悦びなど知的
精神的な躍動・高揚を意味するであろ
う。これらの要素を伴わない登山は単
なる肉体的運動にすぎない。ただ私は
静観的登山を強調する余り、征服的登
山や行楽的登山を排斥する気は毛頭な
い。要するに登山には人それぞれ的好
みや流儀があって、いちがいにその是

非優劣を論ずることはできないからで
ある。もっとも、最近わが国では登山
やスキーもだいたい享樂的になり、都会
的な喧騒や贅沢をそのまま山に持ち込
む傾向がある。そのことが結局、登山
道義の頹廃や自然破壊ないし遭難の危
険にもつながることは、やはり憂慮す
べきことである。

ウェストンの動向を示す
古い葉書・「山」五七三号続報

開発秀三

この葉書は明治三十七年八月二十四
日二十八日に軽井沢で開かれたYMC
A夏期集会(英語)を予告するもので
した。案内状のとおり集会が開かれ
たかどうかを確認するため、資料探し
を始めました。九月一日から箱根で開
かれた集会(日本語)のほうは「YM
CA百年史」で比較的早く確認できま
したが、軽井沢での英語集会のほうは
難行しました。YMCA関係以外の無
教派のキリスト教関係資料まで範囲を
広げて探しましたが、見つかりません。
一月になって、早稲田にYMCA資
料室という場所があることを知り、市
川さんの協力を得て「日本之青年」第
六巻第六号(明治三十七年十月五日発
行)という資料を見せてもらいました。

日本語による報告を読み終わっても
何も見つかりません。ふと巻末にあっ
た英文報告に目をやると、待望の関係
記事が書かれているではありませんか。
この文章には、八月二十六日(金)の
夜に、ウェストンが本場アルプスと日
本アルプスでの経験話を話した、とい
う報告が書かれていました。

この後、私の報告を受けて安江宣
氏が調べられた「ジャパン・タイムス」
8・23号に、この集会の予告記事が載
っていることを教えていただきました。
これにより八月二十六日(金)の夜、
八時から九時までがウェストンの担当
時間であったことが判りました。「ウ
ェストン年譜」によれば、八月二十七
日(土)には「横浜アマチュア漕艇ク
ラブの水中競技会」で委員を務めたこ
とになっています。この関連を、明治
三十八年八月の鉄道時刻表によって検
討したところ、軽井沢を午前五時五十
分の列車に乗ると、横浜には午後二時
四十五分には帰着できたことが判りま
した。委員の役目がどのようなもので
あったかは明確でないの何ともいえ
ませんが、日の長い夏の一日のことだ
というにはならなかったと思われる
ます。

二つの行動記事は矛盾なくつながる
のではないのでしょうか。

図書紹介



神奈川県ヒマラヤ登山隊
一九九二・編

『スペインティーク全員登頂』
―不揃いのクライマー十六人の
ヒマラヤ七〇二メートル―

神奈川県の高校の先生を主体とした
二十一歳から五十七歳までの、年齢も
登山経験も不揃いであるという十六名
からなる隊の全員が、一九九二年八月、
ヒマラヤはカラコルムのスペインティ
ク峰（七〇二メートル）の登頂に成
功した報告書である。

巻頭から四十五ページにわたって、
路傍の花々を愛でたり、土地の人達と
交流しながらのキャラバンから、登攀
・登頂までの美しい写真が飾り、さな
がら同行しているように楽しませてく
れる。

この隊は、①生涯スポーツとしての
登山 ②安全登山の実践 ③地球に優

しい登山、の三本柱を標ぼうして実施
してきたということであり、そのため
昨今問題になっているゴミ処理や医療
対策などは、これからヒマラヤを目指
そうという人、とりわけ中高年の向き
には参考になる一書である。

巻末のパキスタンでの登山に関する
規則一九九三年版や、パキスタン最新
登山事情なども貴重な情報である。

一九九四年三月 神奈川県ヒマラヤ
登山隊一九九二発行 二、七〇〇円
(伊藤博夫)

『一九九二年
桑頂抗沙峰登山隊報告』

当会高所登山研究委員会のメンバ
ーが中心の六十五歳から二十四歳、平均
年齢四十六歳、男五名、女二名、計七
名のパーティーの登山報告書である。
総隊長の川上隆氏（六十五）と登攀隊
長の松永敏郎氏（五十九）が酒席で、
高所委の仕事が一段落したら少し高い
山に登りに行こうと話合ったのが発
端とある。

年齢を考え、六〇〇メートル級、
往復四十日以内、未踏峰、山容は秀麗
であることを条件として山を選び、結
局山容は判らないままの出發となるの
だが、西藏自治区の首都ラサの北北東
一三五キロメートルに聳える桑頂抗沙
峰六五九〇メートルは、願ひ通りの秀

峰だった。日本出發後二十五日、ラサ
出發後十七日目にこの山の初登頂を果
たし、四十三日目に帰国した。

B5判、六十四ページの小冊子だが、
「念青唐古拉山脈考」川上隆、「低酸
素に関連する問題について」松永敏郎、
などの小論文もあり、これからのヒマ
ラヤに小規模遠征を試みようとする中
高年登山者向けに大いに参考となる。

一九九四年三月発行 非売品 連絡
事務所〒164 東京都中野区中野五
三五―八 アポロスポーツ内 ☎〇
三―三三八七―〇六三一
(越田和男)

脇坂順一・著

『八十歳はまだ現役』

何と偉大な人だろうか。八十歳まで
に世界の山百五十峰を登られた体力と
気力、そのロマンあふれる生き方に拍
手をおくりたい。

この本は十年前に出版された「七十
歳はまだ青春」以後に登られた山々の
記録と、外科医の著者自らが考えた独
特の食事と驚異的なトレーニングにも
触れられていて興味深い。専門の登山
家ならともかく、本業のかたわらの登
山。登り始めたのは四十八歳、それか
ら八十歳に至るまでの記録は、世界の
山を目指す者にとって貴重な参考資料

となるに違いない。

昨年先生がモンブランに登られたと
きお供させていただいたが、この本を、
単に先生の偉業を知るだけでなく、尊
敬すべきお人柄と人間としての素晴ら
しい生き方を学ぶことができる本とし
て、心よりおすすめしたい。

一九九四年 山と溪谷社発行 二七
〇ページ 一、七〇〇円
(金子康一)

下越山岳会・編

『飯豊』会報第五号

「下越山岳会」は新潟県新発田市に
ある昭和八年創立の社会人山岳会であ
る。本号は昭和五十年に四号を発刊し
てから十六年ぶりの刊行ということに
なる。

内容は飯豊山塊を中心とした、紀行、
記録三十一篇、その他の山域十篇と、
随想二十篇などである。巻末に昭和五
十年一月から平成三年一月までの山行
年譜がある。

佐久間氏の「書き残しておくこと」、
越後の霊山三十五座に関するエッセイ、
「ネパール娘インディラ・グルン」五
十嵐篤雄氏など、いずれも執筆者の個
性がにじみでている。

一九九二年二月 下越山岳会発行
二七〇ページ (大橋 晋)

自然保護随想

鹿は可愛いが
森も大切

関塚貞亨

丹沢表尾根と大山の間にあるヤビツ峠を越えて、札掛から宮が瀬ダムまでの谷の左側、地図で見ると塔ノ岳から丹沢山までの東斜面と、丹沢山から大札の頭、本間の頭へと続く南斜面の森林を「東丹沢奥民の森」という。

面積は一八二四ヘクタール、標高は塩水橋付近の海拔四〇〇メートルから丹沢山の一五六七メートルまでの山腹に天然林、人工林が交錯していて、天然林では札掛付近のモミ、ツガの森林と丹沢山東面堂平付近のブナ原生林、また人工林では丹沢大洞のケヤキ林などが、見事な景観となっている。

人工林は、適当な広さの土地をポラントイアグループに貸して林業体験をしてもらうことにしている。初期の人工林はヒノキ、スギなどで、スギの中には、直径二五センチほどに育っている林もあるが、最近の区画は、ケヤキ、カエデなどの広葉樹が植えられている。これらの人工林は、区画ごとに身丈ほどの高さの鹿止（ししどめ）の柵で区切られている。丹沢の森に鹿止の柵

が多いのは、それだけ鹿の被害が多いということであろうが、四月中旬に森林学の権威Iさんと共に札掛、大洞地区など奥民の森の一部を観察したときのモミの森の印象が忘れられない。

まず札掛の丹沢ホーム裏のモミの天然林だが、下草が一本も生えていない。わずかに鹿の嫌いなアセビやシキミが点在しているにすぎない。黒い土の斜度二十度ほどの斜面は木洩れ日の差す部分でさえ、下草が全くない不気味な光景であった。あと継ぎの幼樹が育っていないことは、いずれこの極相林が滅びることを意味する。

この原因についてIさんは「鹿が食べてしまったのでは」という。隣の鹿止めの柵があるヒノキの人工林には下草が密生している。鹿の食害説の証拠といえそう。

鹿が増え過ぎ、鹿止めの柵で締め出された鹿が天然林の下草を食べつくしてしまったのではない。森を助けるためには、森の生態系を崩すほど増え過ぎてしまった鹿の生息数を減らすより仕方がない。乱暴な意見を承知でいえば、かつてのオオカミに替わって人間がもう少し強い天敵になる必要がある。鹿の頭数を適正に管理すること、自然保護、「自然の回復」であることを認識したい。

諏訪多栄蔵・著

雁部貞夫／薬師義美・編

『ヒマラヤ山河誌』

諏訪多さんが執筆された文章は三百篇を超えるそうだが、本書は、その主要な諸篇を網羅している。その多数の文章を、雁部、薬師の両氏が適切な編集をしていて、ヒマラヤ登山学の教科書ともいえる。

ヒマラヤ登山、研究をされる方には、好個の一冊といえる。特に最初の、ヒマラヤ小論十二篇は、著者のエキスであり、最終目標ヒマラヤ登山学の成立への提言といえる。（「岳人」二八三、二九四号、昭和四十六年一十二月号に連載）。

二章の、ヒマラヤ今昔抄も「岳人」に連載されたもので、ヒマラヤの風物誌ともいえる。以下の内容は、三、ヒマラヤ——人と辺境 四、カラコルムの名峰五、ヒマラヤニスト抄 六、ヒマラヤ素描集 七、ヒマラヤ——名著とその世界、である。

七章はヒマラヤ名著全集（あかね書房）の訳書のための解説文であるが、探検、登山ルートへの追跡、成果の評価、地域の特徴、参考文献の紹介など多岐にわたっている。

私事になるが、私が昭和三十年代、大阪の山・スキー専門店に勤務してい

た頃、諏訪多さんはその店に頻繁にこられた。そこで、氏の研究の一端を拝聴する機会に恵まれ、氏のヒマラヤに對する真摯な研究態度に敬服していた。私にとって、懐かしく、嬉しい一冊である。

一九九四年四月 ナカニシヤ出版
行 三八七ページ 七、五〇〇円
(茂見 猛)

Ramesh Raj Kunwar 著

HIRE of HIMAL

An Anthropological Study of the
Sheepes of Nepal Himalayan Region

ヒマラヤの奥深くシェルパの村々に長年月住み込み、またボランティア活動に従事しながら収集した情報・体験を体系的に整理した、ネパール人の人類学者による著書である。

一、これまでの研究者 二、生態学的構成 三、火と森 四、経済と生計 五、シェルパ族の生い立ち 六、村の組織と食餌 七、アルコールと文化 八、社会構成 九、宗教 十、神・霊・祭り、および付表から成り立つ。各章でネパール人ならではのシェルパ社会研究成果が詳述されている。

NIRALA PUBLICATIONS 発
行 三三六ページ 三〇〇インドル
ピー
(南井英弘)

書籍受入報告 1994年4月

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
今西錦司	初登山：今西錦司初期山岳著作集	318 pp/20 cm	ナカニシヤ出版	1994	出版社寄贈
市川静子・他	日本 300 名山ガイド (西日本編)	317 pp/22 cm	新ハイキング社	1994	出版社寄贈
諏訪多栄蔵	ヒマラヤ山河誌	387 pp/23 cm	ナカニシヤ出版	1994	出版社寄贈
桑頂抗沙峰登山隊・編	桑頂抗沙峰 (サンディンカンシャ) 登山隊報告 1992	64 pp/26 cm	桑頂抗沙峰登山隊	1994	発行者寄贈
江本嘉伸	西藏漂泊・下巻(チベットに魅せられた十人の日本人)	311 pp/22 cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
山形大学コーポルト会・編	コーポルト：コクセル峰初登頂特集	96 pp/30 cm	山形大学コーポルト会	1994	発行者寄贈
大迫町立山岳博物館・編	早池峰の植物	272 pp/31 cm	岩手県大迫町	1993	編者寄贈
植野 稔	北アルプスの溪を釣る：大イワナの躍る魚止滝へ	173 pp/26 cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
伊達篤郎	遙連：八十路の記	303 pp/27 cm	私家版	1994	著者寄贈
岩橋崇至	白頭山写真集	31×43 cm	SBB	1993	大森弘一郎氏寄贈
太田 敬	守れ権現 (改訂版)	447 pp/22 cm	金星堂	1994	著者寄贈
粕谷俊矩・編	モンゴル・アルタイの夏 1992 年 モンゴル・アルタイ登山報告書	268 pp/20 cm	酒田ヒマラヤ研究会	1994	発行者寄贈
土肥貞之	玉山の小石・智異山の虎(秋田論叢・別刷 1991 No. 3)	31 pp/22 cm	秋田経済法科大学	1991	著者寄贈
土肥貞之	姉妹山春秋録 (秋田論叢・別刷 1994. No. 10)	34 pp/22 cm	秋田経済法科大学	1994	著者寄贈
神奈川新聞社・編	丹沢 ブナは訴える	162 pp/22 cm	神奈川新聞社	1993	発行者寄贈
神谷量平	歌集 自分史史料	221 pp/19 cm	キリスト教社会主義研究会	1990	著者寄贈
神谷量平	歌集 続自分史史料	227 pp/19 cm	キリスト教社会主義研究会	1994	著者寄贈
史占春・編	中国登山指南 (中英二カ国語版)	222 pp/22 cm	成都地図出版社	1993	堀内章雄氏寄贈
James Lucas	Hitler's Mountain Troops	224 pp/25 cm	Arms & Armour	1992	堀内章雄氏寄贈
William L. Putnam	Green Cognac: The Education of a Mountain Fighter	242 pp/27 cm	The AAC Press	1991	堀内章雄氏寄贈
John Roskelley	Stories off the Wall	223 pp/24 cm	The Mountaineers	1993	購入
Nicholas O'Connell	Beyond Risk; Conversations with Climbers	300 pp/24 cm	The Mountaineers	1993	購入
Steve Dean	Hands of a Climber: A Life of Colin Kirkus	278 pp/23 cm	The Ernest Press	1993	購入
Alan Kearney	Mountaineering in Patagonia	143 pp/24 cm	Cloudcap	1993	購入
Walt Unsworth	Encyclopaedia of Mountaineering (2 Rev. ed.)	383 pp/24 cm	Hodder & Stoughton	1992	購入
Peter Gillman (ed.)	Everest: The Best Writing & Pictures from Seventy Years of Human Endeavour	208 pp/32×25 cm	Little Brown	1993	購入

・会務報告

四月理事・評議員会議

日時 四月十五日(金) 十八時三十分

二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕藤平会長、嶋原副会長、小倉、大森、村井、大倉、伊藤、南川、南井、水野、渡辺、溝口、片岡、中川各理事、中島、川崎各監事、斎藤、宮下、神崎、重廣、西村、村木、松田、田部井、廣江、宮本各評議員

〔委任〕中村副会長、松浦、堀井各理事、湯浅、山田、徳久、西丸、小須田、梅本、平林、田中各評議員

評議員定数二十三名のうち出席十二名、委任九名、計二十一名で、本評議員会は成立する旨事務局から説明があり、常任評議員の互選により、宮下常任評議員が議長に選任された。

◆議事

平成六年度通常総会提出議案について定款第三十二条にもとづき、評議員会に説明された。

「第一号議案」平成五年度事業報告および収支決算・財産目録について

事業報告については小倉理事、収支決算・財産目録については大倉理事から説明された。中島監事から四月十四日に中島、川崎両監事および嶋原副会

長、小倉、大倉両理事の立ち会いの下に監査が行われ、結果はすべて正確であった旨、監査報告があり、本件は承認された。

「第二号議案」平成六年度事業計画(案)および収支予算(案)について

事業計画(案)は小倉理事、収支予算(案)は大倉理事から説明され、承認された。

「第三号議案」平成六年度除籍予定者について

小倉理事から除籍予定者は六十五名である旨説明があり、承認された。

「第四号議案」九十周年記念事業の取り組みについて

藤平会長から次の四案について説明があり、承認された。

①「マカルー峰登山隊一九九五」について 総隊長・藤平正夫、登山隊長・重廣恒夫、登攀隊長・山本宗彦、期間・平成七年二月〜五月下旬 ②九十周年記念式典について・全国支部を八

十ブロックに分けて行う ③百年史への取り組みについて ④データ・バンクについて調査研究

また次の二点について説明がなされ、それぞれ承認された。

①「マカルー九十周年記念事業募金」について「マカルー峰登山隊一九九五」を含めた九十周年記念事業達成のために募金をお願いしたい。ただし、

今年もさくらで会いましょう

最近数年間、毎年のように募金を行っているので、できるだけ会員の負担を少なくする方法を考慮中で、総会後適当な時期にお願いしたい旨説明され、承認された。次回理事会には募金委員会(案)を提出することとする。

②ルーム拡張について 会長からサンビューハイツ内の一〇四号室の賃貸およびルームのリフォームを行う旨の説明がなされた。資金的には一〇四号室(約二十五坪)の賃料は管理費込み月額三十万円、年三百六十万円の負担増となること、現ルームのリフォーム(八月予定)は長期積立金を一時取り崩して行うこと、会の収支は厳しくなるが、差し当たり特に心配ない。

〔委員会報告〕

●青年部 四月十四日、クラウン峰報告会。講師・東海支部徳島和男氏

●自然保護委員会 四月十日、ライオンズクラブ会員を対象に小石川植物園で伊藤委員と森林インストラクター三名を指導者として、樹木観察会を行った。参加者百五十名。

●自然保護専門委員会 ①三月二十日、「山の自然学現地講座第八回」を高尾山で行った。参加者三十五名。②四月

三日に第九回として秋川のカタクリ観察会とフィールド調査の実習を行った。参加者五十名。③環境事業団への期末の活動報告を提出した。

●図書委員会 月例会で毎月の新刊山岳図書出版情報をまとめ、一覧表にする作業を実施している。図書室新刊書受け入れ棚に、新刊山岳図書目録(和文)、同(英、仏、独、伊、西文)のコピーを常備することとした。

●総務委員会 支部長会議、総会を五月二十一日に開催する。

●集委員会 四月三日、新入会員のためのサクラハイイク、四十五名参加。ジャック93・九四年にできた同期会の発会式。五月二十八・二十九日に青森支部と若葉会山行を行う。リフォーム

委員会は、三月三十日、四月十二日、四月二十二日、および五月十一日に会合を持つ。リフォームについては五月中に決めたい。七月下旬〜八月下旬に工事を行うので、この間ルームは使えない。五月一日から一〇四号室を借りる。

●学生部 平成六年度委員 委員長・後藤琢史、以下十二名。

●新入会員承認 韓香淑他三十六名(内復活一名)

INFORMATION



◆藤江幾太郎・山の画展・第三十九回

ネパール、ブータンおよび国内の山と旅で得た新作二十五点を発表します。

日時 七月一日(金)～七日(木)

十一時～十八時三十分(日曜、最終日は十七時まで)

場所 朝日アートギャラリー(JR有楽町、地下鉄丸ノ内線銀座C4朝日旅行センター隣り)

電話 三五五七七四〇

◆94日本山岳画協会展

山を愛する画家たちの展覧会です。

日時 七月九日(土)～十五日(金)

十一時～十八時三十分(日曜、最終日は十七時まで)

場所 朝日アートギャラリー(東京都中央区銀座一〇一)

中央区銀座一〇一 電話 〇三

一三五六七一一六七二

◆大町市制四十周年記念

日本山岳画協会展

日時 七月二十三日(土)～八月二十

一日(日) 九時～十六時三十分
場所 大町山岳博物館(長野県大町市神楽町) 電話 〇二六一一二二一〇二二一

◆自然保護全国集会予告

自然保護委員会

期日 九月十七日(土)～十八日(日)

場所 山梨県南巨摩郡早川町町営・ヘルシー美里

テーマ、その他は次号に掲載。

◆ジャック93会・上高地登山会

ジャック93会

九三年度入会同期会の自主活動第一弾として登山会を実施します。

日時 十月一日(土)～二日(日)

場所 上高地山岳研究所

電話 〇二六三一九五一二五三三

日程 十月一日十六時 山研集合

焼岳登山希望者は六時三十分

二日はフリー、希望者は涸沢へ

会費 一、五〇〇円(懇親会費) 宿泊費は別

申込 封書で住所、氏名、会員番号、

電話、生年月日を明記の上、七

月二十二日までに日本山岳会ジ

ャック93会宛。返信用封筒(住

所、氏名を記入)を同封のこと。

●問い合わせ 森田英昭(電話 〇三三三

九九三三三五五)

●希望者が四十五人のときは貸し切りバス(新宿発九月三十日(金)、費用

は一人約六、〇〇〇円)を計画します。

◆有志懇談会のお知らせ

例年六月に開催していた有志懇談会は十月二十二日(土)十四時より小石川涌徳亭で行います。(南井、武田)

◆ルーム改装のお知らせ

日本山岳会ルームは本年七月下旬から八月下旬まで、全面改装します。

●ルーム閉鎖

七月十六日(土)～九月四日(日)各委員会のルーム使用は避けてください。

●事務局は夏休み(八月十五日～八月二十日)を除き事務を行います。

●ルーム開室日は九月五日(月)

・ルーム日誌

(4月)

1日 マカール小委員会

4日 自然保護委員会、連絡委員会

5日 図書委員会 アルパイン・スケ

ツチクラブ

6日 山研委員会

7日 学生部

11日 アルパイン・スキークラブ

12日 二火会

13日 フィルムビデオ委員会

14日 青年部 学生部 会計監査

15日 理事会 評議員会 マカール峰

登山実行委員会

18日 総務委員会

19日 フィルムビデオ委員会

20日 三水会

21日 学生部

22日 科学委員会 リフォーム委員会

25日 資料委員会 集会委員会

26日 自然保護委員会

4月来室者545名

■会員異動・4月

▼物故 登坂信雄(五〇五〇) 5・11

・11 佐久間惇一(二三二五) 5・12

海野治良(二四〇九) 6・4・3 金

子一夫(九六〇九) 6・4・4 清水

利夫(七九五八) 6・4・11 斎藤威

三男(一四八八) 6・4・15 ▼退会

鮑津博史(二〇一七二) 寺田和子(九

三四八) 児玉政彦(一〇六〇〇) 渡

辺文仁(七〇三八) 山下嘉彦(六四

九〇) 以上6・4・1 ▼終身会員

小林智明(四〇四六) 6・4・4

日本山岳会報 山 589号

1994年(平成6年)6月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京(03) 3261-4433

振替口座 東京 3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 技報堂